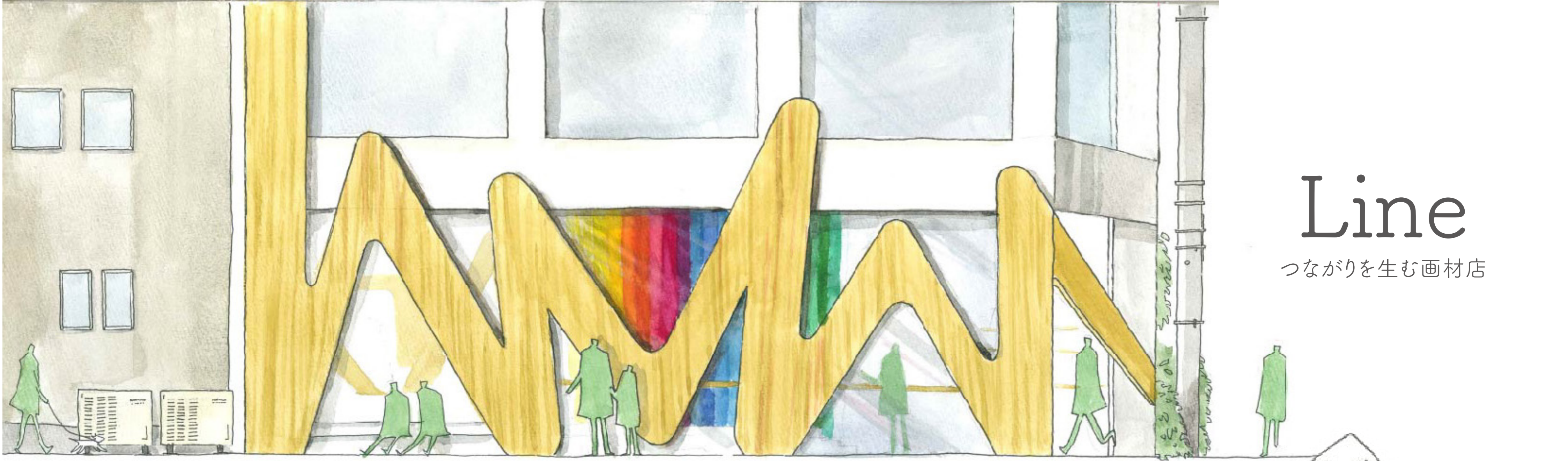


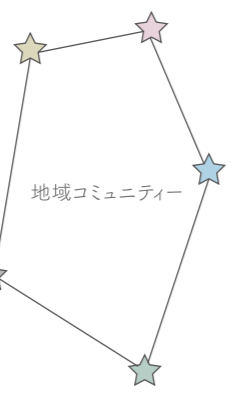
Line

つながりを生む画材店



01.コンセプト

「点と点をくなくで線となり、線と線をつなげば一つの形となる。」
つまり、ひとつひとつの要素がばらばらであっても、それらをつなぐことでひとつの形を生み出すことができるのである。このことは紙の上だけの話にとどまらない。



敷地である柳原商店街には人が集まる場所が点在しているにも関わらず、肝心の商店街にはほとんど人が見られない。点はあるが線が引かれていない状態なのである。
この計画では、空き店舗を魅力的な「点」へとコンバージョンし、それをプログラムによって「線」で繋ぎ、地域コミュニティという、ひとつの形をつくるというものである。商店街再生がやがて、地域全体のコミュニティ形成へとつながっていく。

02.柳原商店街の現状

敷地である柳原商店街はシャッターがおりている店が多く、閑散としたイメージを持つ。高度成長期に買い物場として栄えた商店街の面影は今はどこにもない。

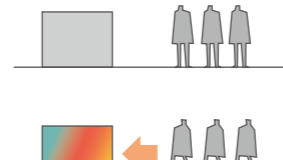


しかし、周辺調査をしたところ、500m圏内には、毎日たくさんの方が利用する大きな公園や観光資源である名古屋城があり、人の行き来が多い場所だということがわかる。
また、小中学校が周りに多く、子育て世代には住みやすい地域となっており、つなぐには閑散とした商店街にも、お祭りの際はたくさんの家族連れが訪れるそうだ。

つまり、人も多く、周りの環境に恵まれた土地なのである。

03.現状からの考察

02.のことから、商店街に人が少ないのは、周りに人がいないのではなく、わざわざ商店街に行く用事がないためだということが考えられる。



つまり、街の人が商店街に行く目的とものを、周りに人がいないのではなく、わざわざ商店街に行く用事がないためだということが考えられる。
商店街を観光地などの「他の点」とつなぐためには「つながりを生む」新たな「点」を生み出す必要はないが、この土地に必要な「点」とは何なのだろうか。

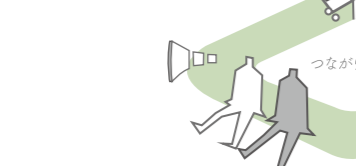
04.つながりを生むには

この計画では、単体での魅力をもつのではなく、周りとつながり、魅力を引き出しあうきっかけとなる店舗が必要になってくる。

そこで、私はその店舗で買った商品をまちで使うことができるようにすることで、新たな価値が生まれるのではないかと考えた。この店舗がまちを形づくる拠点となるのである。

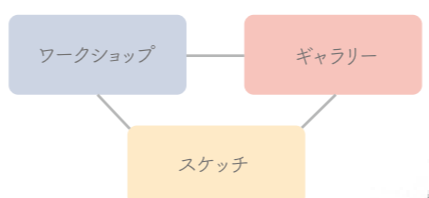
05.画材でつながる

●つながりを生むプログラム



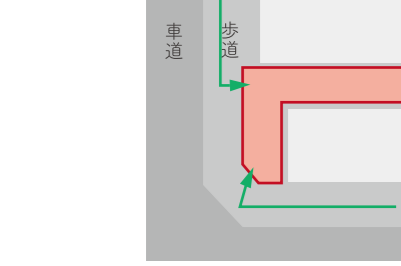
まちで使える商品を取り扱う店舗ということで、私は画材店を設定した。これは、画材という商品が他の物販や飲食類とは違う性質を持っており、それがつながりを生むという点で大きな利点になると考えたからである。

まず、この画材店では主に絵具の原料を販売し、ワークショップではそれ元絵具をつくること「できる」、ワークショップでは新しい交流が生まれるだろう。これが三つのつながりである。
次に、作り絵の具を持って、知り合った人と一緒にまちにスケッチへ出かけることで、他者と交流しながら、まちの新しい魅力を発見することができる。これが二つのつながりである。
最後に、描いた絵は店舗内のギャラリーへ飾られたとしても、素直な交流が生まれる。これが三つのつながりである。
画材は店舗形式によって、こうした多層的なつながりを生んでくれるのである。



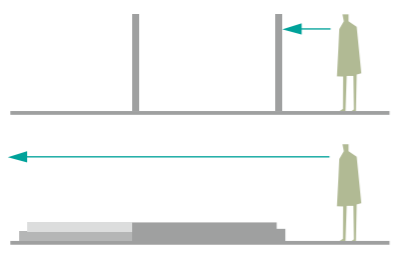
06.つながりを生む空間とは

●歩行者の動線



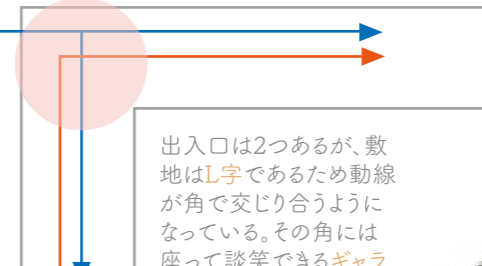
現在の商店街で営業中の店舗のファードデザインを観察してみると、閉鎖的で、常連向けの店舗が多い。よって、なるべく多くの人に訪れてもらえるようにこの店舗は道路側をガラス張りにし、中が見える構造にした。また、全体的な平面と南側の角の両方に出入口を設けることで、どちら側からも目にも止まるようにした。

●空間の仕切り



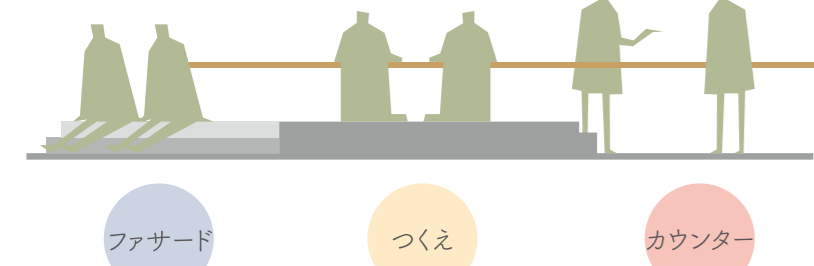
壁ではなく床のレベルをかえることで空間を仕切っているので閉鎖感がなく、空間をつながっている。

●店内の動線



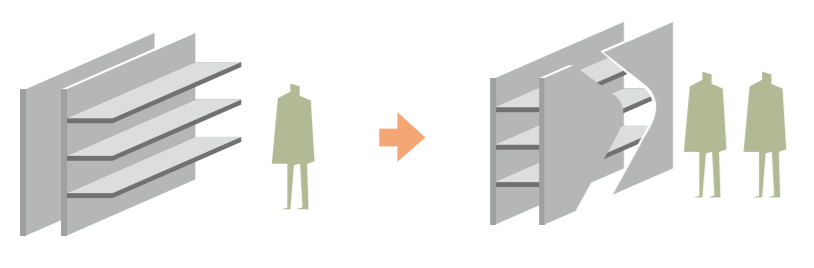
出入口は2つあるが、敷地はL字であるため動線が角で交り合うようになっている。その角には座って談笑できるギャラリーを設けた。

●ファードと家具



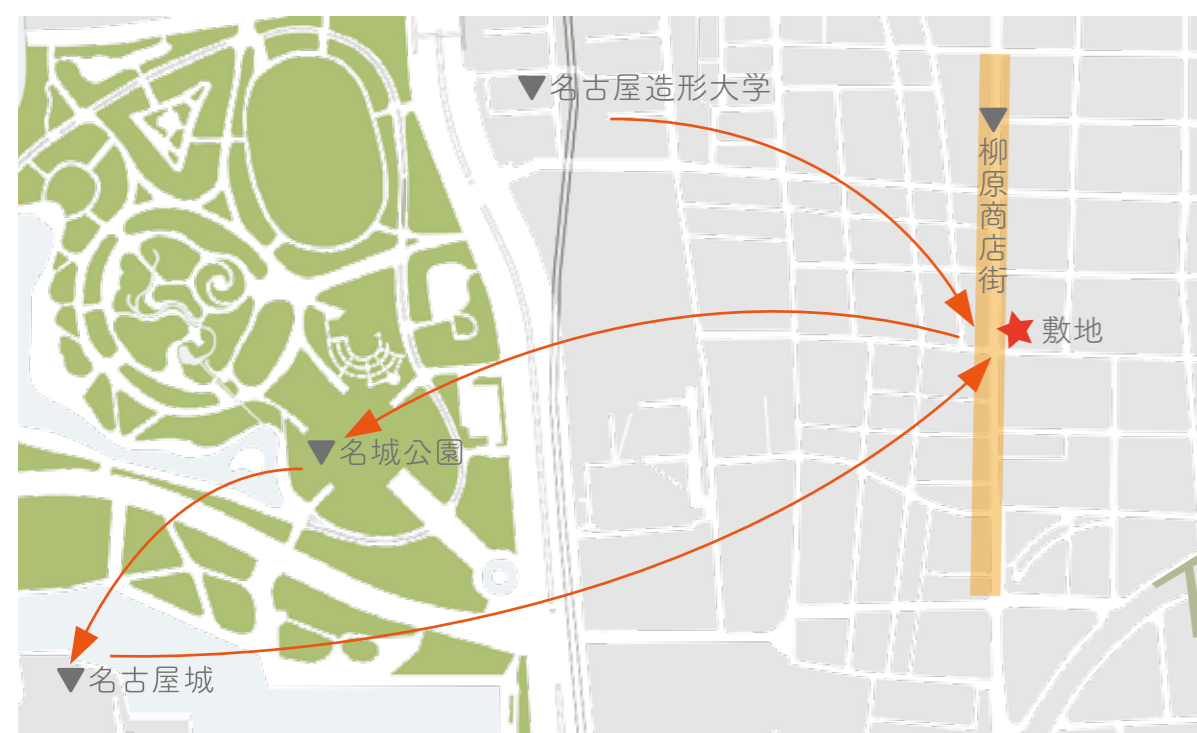
ファードや店内にある木のラインは筆の軌跡をもとにデザインした。ここでの「描く」にまつ行為がまちをつないでいくように、というイメージからである。
また、この木は単なる装飾ではない。店内の床のレベルを調整することで同じ木の板でも多様な使い方をできるように設計した。ある場所ではカウンターにある場所ではつくえになる。既製品の家具より空間との一体感をだすことができていた。

●既存壁の利用



壁をつくる際に既存壁を有効活用しようと考えた。通常、壁を外づいた場合、壁が空間を圧迫してしまう。そこで、既存壁の中に壁を設けることで空間を有効活用できるようにした。また壁をわざと残してライン状のスリットをいれることで、店内のデザインとの統一感がもたらされた。肉と装飾、どちらとしての役割も担っている。

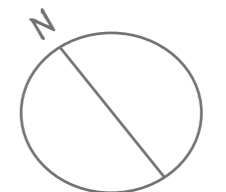
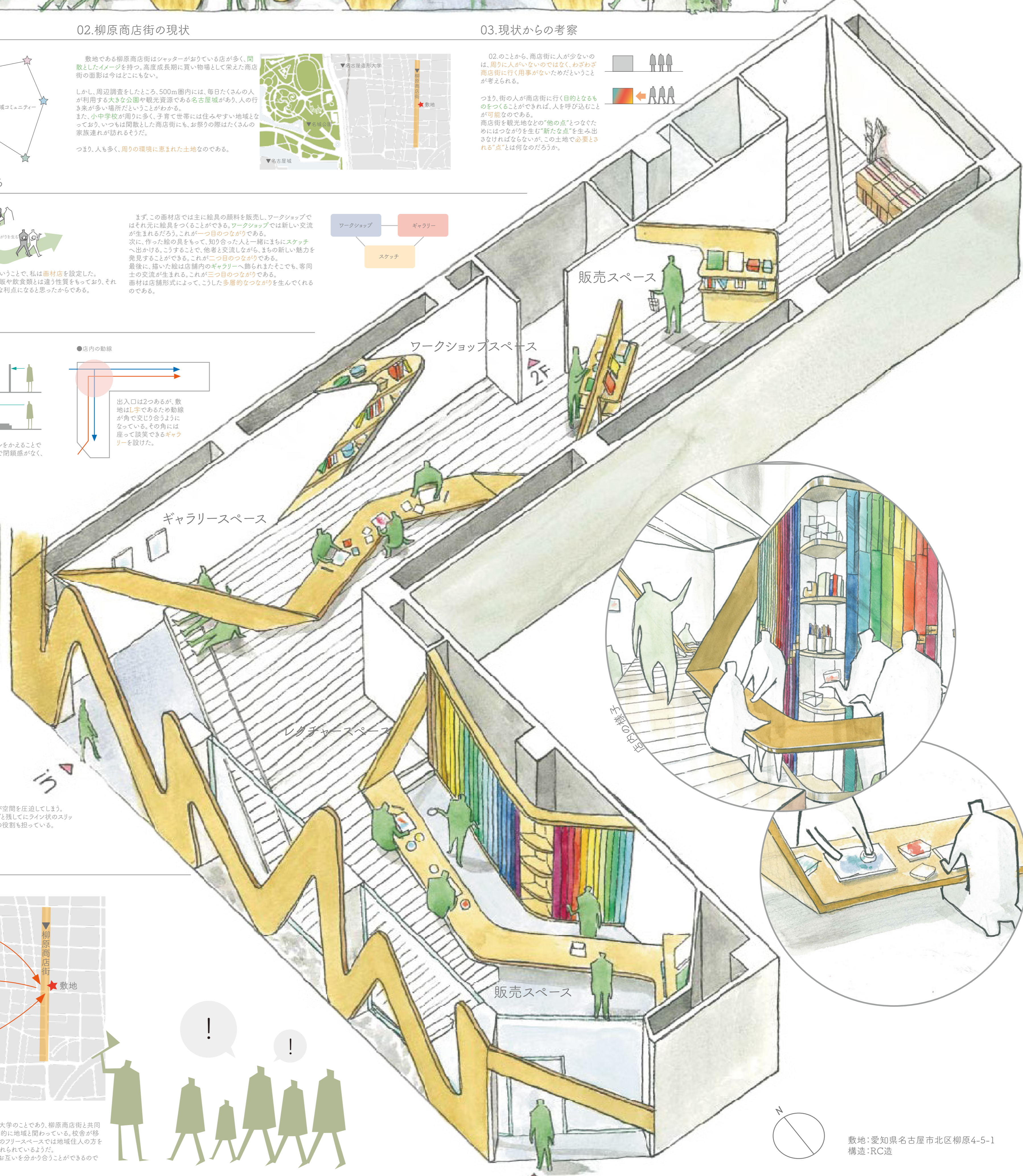
07.運営



●スケッチツアー

敷地の近くの豊かな観光資源を生かすため、この店では定期的にスケッチツアーを行う。そしてその運営を近くにある美大の学生に任せる。できるだけ多方向から人を集めてくるとしてコミュニティを広げることが狙いである。

近くの美大とは名古屋造形大学のことであり、柳原商店街と共同でイベントを行ったりと、意欲的に地域と関わっている。校舎が移転して目が強いながらも、校内のフリースペースでは地域住人の方をよく見かけ、早もまちに受け入れられているようだ。関わりあうきっかけをつくることで、お互い分かちあうことができるのである。



敷地: 愛知県名古屋市北区柳原4-5-1
構造: RC造

